アメリカ創価学会における異体同心

二段階の現地化

川端亮・稲場圭信 著

アメリカファーストの時代に、
多文化共生はいかに可能なのか。
異なる文化と出会った日本型組織は
どのように変容するのか。

組織と翻訳の変遷、ライフヒストリーを絡めた回心の過程と教えの受容から、グローバリゼーション時代における宗教の海外布教のステップを明らかにした、姉妹書『〈SGI-USA〉の55年』に続く宗教社会学の成果。

新曜社

アメリカ創価学会における異体同心

二段階の現地化

川端亮・稲場圭信 著

新曜社

はじめに

創価学会は、わが国でもっとも有名で、最大の新宗教教団である。その会員数は８２７万世帯と公表されている（創価学会広報室 2017: 21）。

創価学会は、日本国内で抜きん出て規模が大きいのみならず、創価学会インタナショナル（Soka Gakkai International：ＳＧＩ）として海外でも活動を行っていることは、一般にはそれほど知られていないだろう。その規模は、現在、世界１９２ヵ国・地域にわたり、およそ２２０万人の会員を擁するまでになっている（創価学会広報室 2017: 26）。国連加盟国数が１９３ヵ国であることからも、ＳＧＩの広がりが、ほとんど全世界に及ぶと言ってよいことがわかるだろう。

日本の他の宗教教団も、新宗教に限らず、神道も仏教も、日本人が海外に移民を始めた明治時代以降、海外布教を行ってきた。しかし、一部を除いては、海外で移民した日本人以外に信徒を獲得することが少なかった。つまり、現地の人々にはほとんど広まらなかった。

アメリカ合衆国においても、１８８５年にハワイへの官約移民（ハワイ政府と日本政府の間の条約に基づく移民）が始まり、その後、日本人の移住先が西海岸へ展開する中で、神道、浄土真宗、浄土宗などがアメリカ合衆国で布教を始めた。しかしながら、現地のアメリカ人にこれらの神道や仏教、

新宗教が浸透する事例はあまり多くはなく、それは20世紀に入っても続き、第二次世界大戦後もアメリカ人が日本の宗教を信仰するケースは多くなかった。

その中で、創価学会は、１９６０年に第三代会長に就任した池田大作がアメリカを訪問し、現地に地区や支部の組織を作ることで、本格的な海外布教を始めたのである。その歴史については、本書の姉妹編である秋庭裕『アメリカ創価学会〈ＳＧＩ-ＵＳＡ〉の55年』(2017) に詳しい。本書でも同じ55年間を対象とするが、意味と組織の変容にとくに焦点をあてて、分析、考察する。

序章でＳＧＩ-ＵＳＡの歴史をコンパクトに紹介した上で、第1章では、日本と異なるアメリカ合衆国の社会的な背景を体現するＳＧＩ-ＵＳＡのメンバーを取り上げて、それらの人々が、なぜ・どのように・何を願って、この信仰を続けているのかを明らかにしようと試みている。日本の創価学会員のみならず、平均的な日本人が知るところの多くない、アフリカ系アメリカ人やゲイのメンバーのインタビューを紹介し、多民族社会において「異体同心（いたいどうしん）」に新たに付加される意味と創発する特性を考える。

第2章は、第1章に加え、私たちがインタビューを行ったＳＧＩ-ＵＳＡメンバー20人の聞き取り調査をまとめ、ＳＧＩ-ＵＳＡへの入信過程を、宗教社会学における回心論から考察している。ロフランドとスタークの入信過程論を参照しながら、ＳＧＩ-ＵＳＡメンバーの宗教的ライフヒストリーを整理し、イギリスの事例とも比較して、なぜ異文化由来の信仰を継続できるのか、その要因を検討している。環境的要因、個人の能動的要因、組織のメンバーとの相互作用の要因に加えて、御利益信仰から出発し利他性の涵養へ至る過程を、「意味の転換」という観点に重きをおいて考察する。

第３章は、複雑で入り組んだ変遷を遂げたＳＧＩ-ＵＳＡの組織の推移を追った。それがなぜ生じ、その変化が何を生み出したかを組織論的に考察している。日本・創価学会では、いわゆるタテ線からヨコ線への変化は、一般には選挙と政治との関連から生じたと考えられているが、政治とは関係のないＳＧＩ-ＵＳＡにおいてもその変化が生じた。その理由を考察しながら、フェイズ２（ツー）と呼ばれる停滞が生じた組織機構上の原因と、21世紀の多民族社会におけるＳＧＩ-ＵＳＡの発展を組織論的に鳥瞰している。

第４章は、布教における媒体、つまり聖典やその翻訳を重要な問題として取り上げる。従来から、海外での宗教の布教の成功要因の一つに翻訳の問題が取り上げられてきたが、ＳＧＩ-ＵＳＡにおいても１９６０年代から急速に、精力的に経典類や機関紙誌の英語化が進められる。

それが１９６０年代から７０年代半ばまでの爆発的な会員増に結びついたことも確かであるが、しかしながら一方で、フェイズ２による停滞も生じたのであった。そのフェイズ２の停滞から抜け出すために、さらなる洗練された英語へ翻訳しなおすこと、すなわち、「日本語が透けて見える英語」から「自然な英語」へ、ヴァージョンを上げていくことが必要であった。つまり、「二段階の翻訳」によって、教えの意味が伝わり、アメリカ創価学会の「二段階の現地化」が実現したと考えられる。

第５章は、日本・創価学会において重要な教学的な焦点である「師弟不二（していふに）」が、アメリカ合衆国のコンテクストでどのように受容され、新たな意味を付与されているかについて、機関紙誌を調査し、会員のインタビューに基づいて考察を行っている。

アメリカ人になじみの薄いと考えられがちな「師弟」という関係、考え方が、アメリカ社会でどの

ように根付き、呼応するのか、その素地を分析・考察しながら、日本とは背景の異なるアメリカ社会における独自の背景を持つ「師弟不二」を描いている。

いずれの章もインタビューと資料をもとに宗教社会学としての思考を巡らせて構成したものである。宗教社会学のおもしろさを読み取っていただければ幸いである。

なお、参照する文献、資料として、以下のものは略して表記する。

御書：堀日亨編　１９５２『日蓮大聖人御書全集』創価学会（第２４１刷、２００５年）

ＷＴ：ワールド・トリビューン（*World Tribune*）

ＳＴ：聖教タイムス（*Seikyo Times*）

また、本書に登場する創価学会とＳＧＩ-ＵＳＡ会員のうち、これまで創価学会やＳＧＩの出版物において、多くの場合、実名で紹介されている方々については実名とした。他の方々は、仮名としている。

目次

はじめに　i

序章　SGI-USAの歴史　1

1　戦争花嫁と日系二世　1
2　ヒッピーからハッピーに　3
3　コンベンション　5
4　フェイズ2　6
5　文化の違い　8
6　十七日間のロサンゼルス滞在　9
7　21世紀の発展へ　11

第1章　アメリカ合衆国における日蓮仏法　13

1　多民族社会における異体同心　14

2　21世紀の女人成仏　34

第2章　SGI-USAへの入信と回心過程　61

1　折伏を受けやすい状態　61
2　入会時の状況　63
3　宗教的探求者と人生の危機　72
4　信仰の魅力と継続性　81
5　御利益から大乗利他への転換　91

第3章　組織のアメリカ化　95

1　1960年代からの組織の発展　95
2　フェイズ2と組織構成の変化　100
3　タテ線からヨコ線〈Geo-Reo：ジオリオ〉へ　108

第4章　二段階のアメリカ化――翻訳の重要性再考　117

1　英語化とフェイズ2　117
2　翻訳の四つのレベル　120

3　「日本語が透けて見える英語」から「自然な英語」へ　132
4　二段階の英語化の意義　137

第5章　アメリカにおける師弟不二　141
1　教えの継承　141
2　師弟不二の翻訳　147
3　SGI-USAメンバーが語る師弟不二　159
4　奉仕するリーダーシップ　173

あとがき　179
年表　185
注　193
参考文献一覧　<5>
索引　<1>

装幀＝新曜社デザイン室

序章　SGI-USAの歴史[1]

1　戦争花嫁と日系二世

1960（昭和35）年5月、32歳で創価学会の第三代会長に就任したばかりの池田大作は、10月1日の深夜、ホノルル空港に到着した（池田 2003: 22-3）。ハワイをはじめとし、北南米にわたる3ヵ国9都市を、24日間で訪問したこのときから、創価学会の本格的な海外布教が始まり、組織化が図られたのである（口絵写真4参照）。

このとき、ハワイ・サンフランシスコ・シカゴ・ニューヨーク・ワシントンなどに「地区」が結成され、ロサンゼルスとブラジルに「支部」が置かれた。また、これらを統括するアメリカ総支部も設定された。当時アメリカにいた会員数はおよそ300人で、その多くがアメリカ軍人が日本駐留中に出会い、結婚して戦争花嫁として渡米した女性であった（井上 1985: 152-4）。このように、国際結婚によって、宗教が国境と民族を越える第一歩を踏み出したのである。

その後、次第に会員が増加する。それまで会合は個人宅で行われていたが、１９６３年1月にロサンゼルス会館が設置される（口絵写真3参照）。場所は当時アメリカ最大の日系人コミュニティとして有名なリトルトーキョーに近いイースト・ロサンゼルスであった。会館は椅子なしで約１００人を収容できる仏間を備えるほどの規模であり、会館に隣接する建物には聖教新聞ロサンゼルス支局が置かれた（三代会長年譜編纂委員会編 2005: 131）。池田の初訪米以来、２年３ヵ月ほどしか経たないこの頃より出版物が印刷されていたことも特筆に値する。

１９６５年、ロサンゼルス近郊のエチワンダで、アメリカ初の日蓮正宗寺院として恵日山妙法寺の起工式が行われ、この頃までにアメリカの会員数は、およそ2万世帯にまで伸びた。１９６７年5月13日ホノルルにおいて寂光山本誓寺の入仏式が営まれ、16日にはエチワンダの恵日山妙法寺が落慶する。二寺の落慶によって日本と同様の、出家の聖職者からなる宗門と在家信徒集団である創価学会という二重構造の体制となった。アメリカにおいても、この二重構造は１９９１年11月に宗門と袂を分かつまで継続した。

会員の拡大に日系人の果たした役割も大きい。戦争花嫁として渡米した女性たちは、当初英語が十分に話せなかったことから、彼女らは日本人、あるいは容姿が日本人のような人たちを見かけると積極的に声をかけて折伏した。その中に日系二世の人たちも含まれていた。日系二世の人たちは日本語が十分にはできない場合もあったが、日本人女性と、戦争花嫁の夫である英語ネイティブの人々からなる集団でのコミュニケーションにおいて、その橋渡しとなる大きな役割を果たした。

2 ヒッピーからハッピーに

１９６０年代半ばから日本人以外の白人などの入会が増えて、会員の急増期に入っていく。現地のアメリカ人の入会につれて、日本人の割合は、１９６０年には96％であったが、１９６５年には77％、１９７０年には30％に減少した（Williams 1972: Appendix 3）。

この頃の会員の属性については、１９６８年には、会員の41％が軍人か、その配偶者であった。その後、軍関係者の割合は急激に低下し、「中核メンバーは、非東洋人で、独身で、30歳未満で、性別に偏りがなく、学生か、下層のホワイトカラー労働者かまたは、非正規の雇用者で中の下の階層」となった（Snow 1993: 201-3）。このように、１９６０年代後半にＳＧＩ-ＵＳＡ[2]は、会員に占める日本人とアメリカ人の割合が逆転し、組織のエスニシティによる構成が大きく変わったのである。

この発展期の多くの白人等の入会は、初代理事長ウィリアムスによる強力なリーダーシップの下で進められたストリート折伏、さらにはアメリカ社会のカウンター・カルチャーの流行も、それを後押しした一因と考えられる。

ストリート折伏は、毎日、毎晩、街頭に出て行う折伏で、大量に入会者を得た。当時の入会者数は支部単位で見れば、日本の支部よりもアメリカの支部の方が多くの入会者を記録している。たとえば、１９６６年２月の折伏数は、日本の創価学会の全支部を含めても、トップはサンディエゴ支部（２６３世帯）であり、第二位はサンフランシスコ支部（２５７世帯）であった。１９６７年６月以降は全

米で毎月２０００世帯を上回る入会があり、とくに9月には３２６８世帯に上ったという（ウィリアムス 1989: 233/237）。

折伏によって大量の入会がある一方で、かなりの数が脱会したため、当時の会員数を正確に把握することは非常に難しい。１９６５年から６９年にかけて会員数は3万人から17万人に増加したと書かれたものもある（Parks 1980: 340）。このような急激な増加は70年代半ばまで続いたのは確かであろう。

この時期のアメリカ社会は、公民権運動の波が全米を揺り動かしており、さらにベトナム反戦運動もかつてない規模で盛り上がっていく時期である。そして既存の社会体制の矛盾と価値観の亀裂を指弾するヒッピーが登場し、さまざまなカウンター・カルチャーが興隆する。

サーフィンとマリファナを旗印にした西海岸のヒッピーが、ストリート折伏によって入信し、１９６８年にイースト・ロサンゼルスからサンタモニカのビーチフロントへ移転したＳＧＩ-ＵＳＡの本部に押し寄せてくるのである。新たな本部会館は三階建ての建物でカーペット敷きであり、三階に椅子席で３００人収容の仏間、また二階にも50人収容の仏間を備えていた（最大収容人数は５００人）。イースト・ロサンゼルスの会館に比べ収容人数が大幅に増加しただけでなく、ロサンゼルスの東端から西の端にあるサンタモニカのビーチフロントへと一挙に移転したことが注目される。

つまり、日本人や日系人の多いイースト・ロサンゼルスを離れ、ヒッピー世代の若者の多く集うビーチフロントへと移転したのである。この移動は、ＳＧＩ-ＵＳＡがもはや日本人と日系人に依拠した日系宗教から脱却しつつあることを意味していた。

3 コンベンション

１９６０年代半ばからの会員急増期は、ストリート折伏とともにコンベンションが特徴的な活動としてあげられる。日本の創価学会は１９５４（昭和29）年に開催された青年部の体育大会から始まり、１９６３（昭和38）年の第一回関西文化祭に連なる文化祭でも有名であるが、ＳＧＩ-ＵＳＡではそれがコンベンションとして開催された。

アメリカにおける文化祭は、１９６３年にシカゴで開催された最初の全米総会から次第に規模が大きくなり、６８年８月にハワイで開催された第五回全米総会で最初のコンベンションが実施された。コンベンションは、それまでの全米総会と異なり、開催都市の一般市民に向けて公開される行事を盛大に行い、それに付加する形でＳＧＩ-ＵＳＡの年次総会を実施するものである。とくに１９７５年のハワイ・コンベンションや７６年のアメリカ建国二百年を祝って、ボストン、フィラデルフィア、ニューヨークの３都市で開催されたコンベンションは、大規模なものであった。

１９７５年１月に「創価学会インタナショナル（ＳＧＩ）」が発足し、池田はＳＧＩ会長に推挙され就任しているが、その年の７月に開催されたブルー・ハワイ・コンベンションでは、ハワイの観光客なら誰もが訪れるワイキキ・ビーチに巨大な人工の浮島まで作るという大掛かりなものだった。

浮島は、幅は30メートルだが、奥行きは２１０メートルにも及び、高さは21メートルで、マウイ島にあるハレアカラ火山を摸して、その噴火口から噴煙を上げたりする仕掛けになっていた。そして、

その浮島の上に舞台を設けてビーチ全体を観客席として、ショー仕立てのさまざまなイベントを3日間にわたり繰り広げたのである。最終日には一万発の花火が打ち上げられ、ワイキキ・ビーチに詰めかけた5万人もの観衆は、大興奮と大歓喜のうちにフィナーレを迎えた。

4 フェイズ2（ツー）

翌年、1976年のアメリカ建国二百年を祝って、ボストン、フィラデルフィア、ニューヨークの三都市で開催されたコンベンションは、五千人ものメンバーが六番街をパレードしたが、しかしながら、ニューヨークの会員や役職者のかなりの数が参加しなかったという。

ボイコットしたメンバーの数は、ある人は三百人と言い、ある人は一千人と言ったそうだ（Parks 1985: 152）。この時期、初代理事長のコンベンションとストリート折伏重視への反発が、ニューヨークを皮切りに一気に表面化したのである。ニューヨークでは73年から75年にかけてストリート折伏が最盛期を迎えたが、すでにこの時期から、コンベンションを一年の活動の頂点に据え、そのために膨大な活動のエネルギーを傾注し、同時にまた教勢拡大のために激しい弘教（ぐきょう）へとメンバーを駆り立てる大量折伏路線に対し、大きな不満が高まっていた。

教団活動への滅私的な没入は、メンバーの家庭生活を脅かしたり、あるいは地域や職場において責任ある振る舞いをすることを困難にするようになっていた。それだけでなく、日蓮仏法の教学的研鑽や池田の指導の咀嚼、そして、それに基づき自己の成長を図ること、つまり、信心そのものが妨げら

れかねなかったのである。

また、フェイズ2が始まった1976年頃まで、組織の役職者は、組織の過半数を占めるアメリカ人が就くことは少なく、すでに少数派になっていた日本人が多くを占めていた。アメリカ人も役職者として登用し組織を運営するべきだとの問題提起によって、組織が混乱を来し、青年たちの活動がまったく停止してしまったのである。この頃から始まる停滞期がフェイズ2と呼ばれる。

組織的な活動においては全米総会など大きな会合も大幅に縮小し、大規模なコンベンションも行うことができなくなり、組織的な折伏も行われなくなった。メンバーの活動は、座談会や少人数での勤行会、および教学の研鑽に限定されたという。そして、あらゆる会合の回数が激減した。

フェイズ2では、会員数もまた急激に減少する。SGIの報告では、25万人の会員がフェイズ2末期には約3万人に減少したという（ウィリアムス 1989: 279）。研究者のパークスは、1970年代半ばには6万人の活動的なメンバーがいたが、79年には3万人に減少したと報告している（Parks 1980: 341-2）。組織的なストリート折伏の一時的な中止[3]とそれ以前に入会した会員の定着率が低かったことが、会員数の減少を招いた直接的な原因といえるだろう。さらに青年層の脱会が組織の活動に与えた影響は大きかったといえる。

フェイズ2によって、組織は運営面や活動面を民主的運営に変え、メンバーの自発的信仰による人間革命を目指す路線へと変更された（ウィリアムス 1989: 273-311、Parks 1985: 149-213、Hurst 1992: 228-33）。1977年と78年はかつてのようなコンベンションは行われず、また全米総会も規模を大幅に縮小した。しかしながら、路線変更の停滞期はすぐには終わらなかった。

5 文化の違い

SGI-USAは1979年までの間に組織を改編したり、性別・年齢階層別の組織[4]を確立しようとしたり、役職者を減らしたり、現地人を役職者に登用したり、さまざまな対策を打ち出す。しかし、なかなか効果が上がらなかった。その最中、1979年4月に「第一次宗門問題[5]」によって、池田は創価学会第三代会長を勇退する。

当時の聖教新聞では、池田の記事がほとんど掲載されない状況にあった。その状況を変えたのが、1980年秋に開催されたシカゴ文化祭である。「カプチャー・ザ・スピリット」と銘打たれたこの文化祭は、池田が会長勇退後再び直接会員の前に姿を現す最初となった。

そして、このシカゴ文化祭の後、1981年からコンベンションは復活していく[6]。1982年にはワシントンDCで総勢一万人のパレード、ワシントンDCラリーが実施され、この後も80年代後半まで大コンベンション時代が再来する。

もちろん、コンベンションでは組織を上げて全員が力を合わせて取り組むために、アメリカ社会において、民族や階層の分断を乗り越え、メンバーが一つになるというアメリカ社会には元来存在しない大きな長所もある。そうだからこそ、コンベンション時代が再来したと考えられる。

しかしながらこの時代は、アメリカ社会の中で、アメリカ文化のまっただ中において、日本の組織である創価学会は完全なアメリカの組織になりきっていなかったといえるだろう。またどのような組

織に生まれ変わればよいのかも、明確には理解されていなかったのだろう。おそらく、フェイズ２の暗雲を払い、ＳＧＩ-ＵＳＡが前進するために、当時はまだアメリカにおいては、やはりコンベンションと大量折伏路線以外には選択肢がないという状況にあったと思われる。

６　十七日間のロサンゼルス滞在

１９９０年２月、池田はロサンゼルスに十七日間滞在し、連日会合を開いて、再度、路線変更を指導した。９０年代以降の変更点を中野・粟津（1996: 198）では、以下の四点にまとめている。ストリート折伏は中止され、友人知人に対する対話形式の布教方法に変更したこと、文化人の会員を主体とする文化本部が結成されたように、教団組織の構造を重層的に構成し直し、各部独自の活動が展開され、幅広い層から会員を集めるようになったこと、上意下達的な意思伝達方法から一般会員の意見を地域組織の運動に反映する方法の確立を目指すようになったこと、そして最後に、日本の文化的要素を極力排除し、アメリカの青少年が違和感なく参加できる「アメリカ仏教」の樹立を模索するという転換である。

この転換を実施するために、池田の十七日間のロサンゼルスの滞在直後に中央（最高）会議が設けられ、組織の人事や活動などの重要な項目を決定するようになった。それらが実行され始める１９９１年に創価学会は日蓮正宗から破門される。このような激動の時代に、長らく理事長の座にあったウィリアムスから新しい理事長に替わるのである。